



次第に記載してある通り、2時50分から御神火遷しが始まりました。本殿の前で火を起こしていましたが、距離が遠く、一段高いところで火を起こしていたのでどのようにして着火したのかは確認できませんでした。



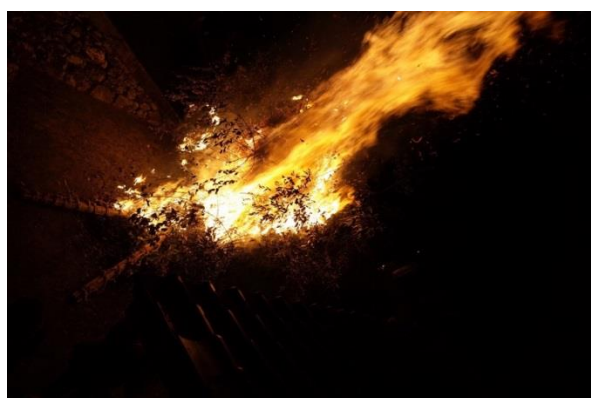
着けたその火を小松明に遷し、3時ジャストにいよいよ大松明に点火です！



大松明には乾燥した小枝や葉っぱが入れているのですぐに勢いよく燃え上がります。素人目には祭のハイライトに見えますが、火を扱うひと以外は祭の進行に無関係に直会を続けています。左右の宮座の建物は夫々3部屋に分かれています。6町の宮座に割り振られているようです。他の部屋のひととの交流無しにひたすら宴会が続きます。



大松明の火が強すぎて宮座の建物の壁板が熱くなります。宮座のお世話をする住民の方が時々ひしゃくで壁に水を掛けて冷ますほどです。それにも無関心で宮座の直会は続きます。



献饌、祝詞奏上に続き、消灯して厳かに御霊を神輿へ遷しました。それとは無関係に直会は続く。

続いて、拝殿にて御神楽奉納。それにも無関係に直会は続く。



秋の深夜とは言え、大松明に近付くと熱いくらいです。

そもそも何故、このような長さ 10m 以上の大きな松明に火を点けるのか。昔、村人に悪さをする大蛇が居て困っていたそうです。大蛇に見立てた大松明に火を着けて炎で退治することに見立てたとか。

徐々に大松明が燃えてきて火勢も弱まってきました。



ずっと直会を続けている意味が理解できませんでした。打ち上げなのか、あるいはこれからの行事への景気づけなのか。ただ、ひたすら飲み会を続けていたところ、4時になると突如、集合が掛かり、お神輿に担ぎ棒を組み込む作業が始まりました。やっと、一部の宮座の衆が直会から出て来ました。



その頃になると流石に直会の部屋に残っている人が減り、観客も徐々に減り出しました。



いつが終わりなのかはつきりせず、4時も過ぎたので帰途に着きました。

その時間帯になると、まだあたりは暗いにも拘わらず、家々から親に伴われて法被を着た子供たちが現れます。早朝の子供神輿でした。

これからまだ日中、祭が延々と続くのは長丁場で大変だと思いました。また、宮座の衆が総出で何かをするわけでもなく、きちりと仕事分担がされているようです。しかし、果たして6町の宮座全体での一体感を醸成することが出来るのか、理解できません。また、未だにあの直会の目的がわからず、今後、調べなくてはならなくなりそうです。

(会員 高橋 浩次 & 直子)